英國の家庭及び婦人に就いて

宮川壽美子

○家庭と學校との關係

英國では母親たる人も皆相當の教育がありますゆゑ、子女の教育につきて心を留むること深く、從ッて學校と家庭との關係が餘程親密で、父たり母たる人人は、折折學校へ往ッて親しく子女の教育の實況を見るのであります、たま卒業式などの際には、學校は父兄を呼んで、その教育狀態を巨細となく見せしむるが例であります。また我國では私立學校に、あまり整頓せるものなき爲でもありませうが、世間では一般に子女を官立學校に入學せしむることを望むやうでありますが、英國などは之と趣きを異にして居ります。彼國の相當な家では、官立學校よりは却ッて私立學校に子女を入學せしむる傾向があります。その理由は官立學校では、視學官などが嚴く干渉するを以て、學科など勢ひ機械的に教授せらるゝのみならず、生徒の數も多く且つ往往規則に拘泥するため、教師の理想通りに子女を教育することが出來ぬといふ缺點があるためであります。これに引換へ、私立學校では、五十人以上は入學を許さぬといふやうに、生徒の數にも制限を加へ、且つ校長たる人は相當な人格を備へ、理想を有し他の干渉を受くることなくして自己の意見を實行し得る次第でありますから、父母たる人は特に此種の學校を擇んで子女を託する風があります。曾て同國の一婦人が、友人にその子女を或學校に入學せしめんことを勸めた書柬中に左の如き一節が見えました。

目下私は二人の兄弟を某學校に託して教育して居りますが、その校長は淘に高尚な品性を備ふる紳士で　該校のモーラリチーの如きは極めて好況であります。兄は學業の進歩頗る佳良で、弟の方は少しく之に劣りますけれども、兩人共

に入學以來日尚は淺きに拘らず、肉體上並に精神上の發育頗る良好で、品性も漸次向上しつゝあることを認めます。クリスマスの休暇の時、教員を招待したるに、相互の間、些かも隔意なく、恰も兄弟知己と相語るが如き感を起しました。されば尊姉の子女も、願くは此學校に入學せしめられんことを望みます云々。

この書柬は全く母親の手に成ッたものでありまして、眞に深き注意と愛情とが籠ッて居るやうに思はれます。

○家庭と社會との關係

我國では、多く夫ばかり社會のことに關係して、妻の方は餘程疎隔して居るやうに見えますが、英國では、妻も夫と其に家庭以外の事にも盡して、敢て讓らぬ位であります。これ彼國では、家庭で執るべき婦人の業務の種類が、我國の程に多からぬ結果でありませう。彼と我とは元來國情を異にすることなれば、一概には論じ難いですけれども、彼國では男女結婚するときは、新夫婦は舅姑と分れて、別に一家を設くるが常で、且つ女子でも皆相當な學識を備へ、頭腦も明敏で、成るべく時間を經濟的に使用するやうに力むるゆゑ、從ッて外出する餘暇も多く得らるゝ譯であります。また舞踏會などにも、多くは夫婦相携へて行き　國會の開會式には、いつも兩陛下俱に臨場せらるゝが例であります。今回米國の陸軍卿タフト氏が比律賓視察の公務を帶びて來るに際しても、夫婦同伴なるが如き、此等は歐米諸國では普通のことで、少しも珍しくはありませぬ。さてかく夫婦打揃うて外出する事は　子供の家庭教育上、一家の經濟上大に弊害のある事で、婦人の社會的事業に關係することは一朝一夕に其可否を決することは出來ませんが、兎に角婦人も男子と今迄よりも一層多く扶けねばならぬと存じます。例へば男子の交際上必要なる宴會の如き、成るべく家庭で十分に愉快に妻が援けて開かせるやうに致したいものです。

主婦が家庭で共共に助けて宴會を開きますと、今までの如く茶屋などで催す必要がなく、從ッて社會の改良をも足進することが出來やうと思はれます。從來のやうに、女子が男子の足もつれとなる如き事は勉めて改めたいものであります。

我國では女子を養育するに三從の教訓を守らしめて居る結果でありませうが、日本の婦人は頗る忍耐力に富み、艱苦にも、堪へ、他に嫁して舅姑に事ふる場合に至れば、わが身の快樂を殺いでも、他を奉養せんことを勉め、克己と服從の精神が比較的に發達して居りまして、從ッて舅姑にも愛せられ、また舅姑あるがため、新夫婦の愛情が一層親密に保持せらるゝ傾向もあるやうです。また一家の主婦としては子女の掬育愛養に勵み、他日母となりたる曉には子女の孝養を受くるが如き、大體より觀察しますれば、日本女子は柔順の德によりて、却ッて勝利を得て居るやうに思はれます、右は我國婦人の一特質と稱しても宜しかるべく、

いかに社交が發達しても、此等の美德は傷くることなしに保存して置きたいものであります。

英國などでは、女子なりとて、言ひたき事は遠慮なくいひ、爲すべき事は何事でも自由に行ふことを妨げぬのでありますが、上述の克己忍耐の力に至りては、迚も我國の女性に及びませぬ。私の知れる英國婦人が屢私に向ひ「日本では新夫婦と老夫婦とが同居して居りても、別に不平も衝突も起らずして家庭が平和に治まッて行くといふのは實に不思議と考へられます、私等ならば直ちに親と衝突して、迚も和樂なる家庭を維持することが出來ませぬ。」と云ッて、感服して居りました。此時私は答へて、隨分ある人は衝突もしますが、世間では之を當然として許しません。あれは嫁か姑かどちらかが惡いと非難します故、常に修養して爭はぬやう務める結果でありますと申しました。

前陳の如く、英國では子女が結婚すれば兩親より別れて一家を構ふるので、決して徒に親の脛をか

ちるやうな事はいたしません。何處に住まうと、如何なる生活を營まうと全く意のまゝで、これが即ち彼等をして大に自恃心を發揮せしめ、海外に於ける殖民事業の依りて以て隆盛を極むるに至つた一大原因と思はれます。尤も一利の存する所は又一害の伴ふを免かれざる道理で、一方に於ては多くの未婚者と、愍むべき多くの老人とを生じ、これがため莫大なる資金を投じて養老院を設立するが如きは事情已むを得ないのであります。倫敦では諸處に宏大なる養老院が設けられていづれも三千人四千人といふ多數の老衰者を收容保護して居ります。

○家庭の娯樂につきて

英國の家庭でいつも最も樂しく感ぜらるゝ時は夕餉の前後であります。まづ大なる食卓を楚楚たる白布をもて覆ひ、その上には四季折折の美はしき花を綺麗に飾りつけ、定刻に至れば家人が卓の周圍を取捲き、その日〳〵の面白き談話を交換しつゝ、和氣靄靄の裡に一時間もかゝりて飲食するのでありまして、我國の如く默然として食事をするやうなことはありませぬ。かくて食事が濟むと、下婢が其處を片付け、家族は別室に移りてピヤノやヴァイオリンを彈いて遊び、それが終はる〻父親がヂッケンスとかセイクスピイヤとかいふ人の小說などを面白く讀みます、すると子供等は或は父の膝元にからまつたり、或は暖爐の側に座を占めてこれを聽き、母親も編物を手にしながら之を聽いて居るといふやうな風習であります。彼地の文學には宗教的趣味が大に加味せられて居るゆゑ高雅純潔なものが多數ありまして、さながら聖書でも讀んで居りはせぬかと思はるゝ位であります。

○婦人と交際との關係

これは世間で往往耳にする話でありますが。我國では妻が若しお客を招待することを嫌ひますならば、夫は經濟上甚だ不得策とは知りながらも特

にこれを料理店に案内するといふ風であります。然るに英國では、婦人も男子に劣らず、なか〳〵交際好きでありますから、啻に客を招待することを厭はざるのみならず、時としては夫の手先となりて夫を幇助することがあります。例へば夫が大學より「日本の教育」といふ講演を託せられ、それにつき必要なる材料を蒐集しなければならぬ場合ありとせんに、男子が直接日本婦人に對ッて質問するのは面白からぬゆゑ、かゝる時分には、細君が斡旋して、日本婦人をその家に招待し、談笑の間、巧みに種種の質問を試みて、夫が求むる所の資料を得るが如き事であります。また英國では、招待客の來りたるときは、家族總出でお迎へをするのでありますが、其客をば直ちに客室に通さずして、別に一室を供し、此處で、五分間なり十分間なり結裝を爲さしめ、その後で客室へ通すのが例となッて居ります。我國では途中で着衣が雨風に濕れやうが、または塵埃で面が黝まうが、少しも構はずして、その儘客を應接室へ通しますが、これはあまり面白からぬ風習ではありますまいか。

△之は困つものならずや

余の西洋の某國に在るや途上にて、小學校を參觀せし際に見知りたる十歳の女兒に會せり、余彼女を伴ふて家に歸り、問ふて曰く『嬢は菓子が好きか』『ノー』『然らば水菓子か』『ノー』『それならば何だ』『私に學校にて貯金をして居ますから錢が好きだ』蓋し彼女の家は貧にして、學校の貯金競爭に於て、他の兒童に恥づる所あるなべし、乃ちニッケル貨(五仙)を出して與へたるに、彼女の喜び、望外に出でたるが如く、『明日は一時に五枚ふえる』蓋し一仙の切手五枚をいふ是より余は彼女に用達を爲さしめ、其度毎に、一仙二仙乃至五仙づゝを遣はせしが、彼女は復命する毎に、必ず『家に歸る』といふ、錢の催促を爲すなり、錢を遣れば、直に『左樣なら』といふて去る、遣らざれば、何時に爲つても歸らず、其現金なると、其懸引に長ずると、其小さき頭より、あらん限りの智慧を絞りて、一文も多く取らんとすると、兎ても日本の子供には出來ぬ仕業なり、之も亦困ッたものならずや、米國の一教師、記者に語り曰く、猶人の子供は、最も算用に長ずと、彼女は猶人の娘に非ず、而も猶斯の如し(某氏談)